文の内的定義と極小主義

中村一創
東京大学大学院

本発表では、近年の極小主義プログラムの研究で無視されてきた文の概念が、我々の内的言語意識に確かに存在し、かつそれを可能にしているのは統辞法であることを論じる。

(1) a. おはよう　b. ジョンがケーキを食べた　c. ジョンがケーキを食べたと
d. John ate the cake　e. Did John eat the cake?　f. that/if John ate the cake

(1)は全て文法的だが、「文」の定義を頭に思い浮かべずとも、日本語話者は(1b)を、英語話者は(1d, e)を文と判断し、他を文でないと判断する。文らしさと文法性とは別の尺度であることに注意されたい。(1)から、時枝(1941)も指摘するように、我々の内的言語意識が文の判断を可能にしていることが予測される。そこで、文の判断を可能にするのが何なのかという問題が出てくる。

中村(2021)は、英語の主語・助動詞倒置が直接疑問文のみで要求されることに着目し、統辞法によって文の判断が可能になることを論じたが、本項では今一つの根拠として拡大投射原理(EPP)効果を挙げる。EPP効果の説明として最も有力なのはChomsky (2013)のラベル付けアルゴリズム(LA)である。しかしLAはDynamic antisymmetry、Feature-equilibriumという余計な想定を統辞法に要求するという理論的問題を孕んでいるのみならず、経験的にも欠陥がある。there構文や場所句倒置、述語倒置といった、φ素性の一致を伴わないEPP効果の中心的なケースを説明するのが難しいのである。そこで、中村(2021)に従い、文は我々の言語能力において(1)のように定義されていると考える。

(2) 構造上最も浅い位置(の一つ)に時制/法要素がある句はC-Iインターフェイスで文として解釈される。

構造上の深さは、主辞同士のc-command関係によって測る(Epstein, Kitahara, and Seely 2019参照)。つまり、時制/法要素が他の主辞にc-commandされていなければその句は文として解釈されるのである。Chomsky (2020)における時制が軽動詞vの持つ素性であるとの考えに基づくと、従来の枠組みにおける英語などのIPは(2)の定義を満たさない。実際は、格付与のためにINFLを要求する言語では(2)を満たすためにvもしくはvPがINFLの「指定部」に移動しているのであり、「主語」を伴うvP移動が英語などにおける拡大投射原理(EPP)の正体なのである。

(3) vP移動の派生
a. {EA, {v*$_{[T]}$, {V, IA}}} (文ではあるが文法的でない)→
b. {INFL, {{V, IA}, {EA, {v*$_{[T]}$, ~~{V, IA}~~}}}} (文法的だが文でない)→
c. {{EA, {v*$_{[T]}$, ~~{V, IA}~~}}, {INFL, {{V, IA}, ~~{EA, {v*$_{[T]}$, {V, IA}}}~~}}} (文法的な文)

(4) v移動の派生
{v*$_{[T]}$ {INFL, {EA, {~~v*$_{[T]}$~~, {V, IA}}}}}

(3b)では、VPが形態論上の要求で接辞のあるINFLと隣接した位置まで動く。thereや場所句、述語(句)は外項と同様にvP内に生起する以上、vPと共に移動して当然である。一方で、日本語においては一致によらず格が与えられるとすれば(Baker 2015)、INFLは必要なく、Fukui and Speas (1986)が主張するように何も移動せずとも(3a)のvPが文となる。

このように、EPP効果が存在することはとりもなおさず「文」という概念が統辞法によって可能になっていることの証拠である。しかし、極小主義における文研究が最終的に解決しなければならないのは、なぜ句とは別に、一見必要のなさそうな文という概念が存在するのかという問題である。